２０２３年１月１５日「最初の弟子たち」青戸教会　　高橋克樹牧師

聖書　出エジプト記１８章１３～２７節、ルカ福音書５章１～１１節

ルカ福音書５章１節以下によると、イエスはゲネサレト湖（＝ガリラヤ湖）畔で２艘の舟が岸にあるのをご覧になって、そこで漁師が網を洗っているのを見ると、そのうちの１艘のシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すように依頼をして、船の中に腰を下ろして群衆に話始められたのでした。そして、話し終えたところで、シモンに沖に漕ぎ出して網を降ろして漁をするように命じられました。しかし、シモンは自分たちが前日に夜通し漁を試みたけれども、何も獲れませんでしたと、漁をしても何も成果はないことを自分たち漁師の経験上からイエスに申し立てたのでした。けれども、シモンは「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と答えて、沖まで漕ぎ出し、網を降ろしてみたのでした。すると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになったのでした。そこでシモンはもう１艘の仲間の舟に合図をして来て、手を貸してほしいと頼んだのでした。ところが、収穫できた魚の量が多すぎて２艘の舟が共に沈みそうになったので、シモンがイエス「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言って、助けを求めたのでした。シモンの仲間であるゼベダイの子ヤコブもヨハネも同様に恐怖感に襲われたのでした。それに対してイエスは「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と言われたのです。そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従っていったのでした。

この一連の経過を見ると、いくつもの疑問が出てきます。

まず、大漁の収穫によって舟が沈みそうになったところで、シモンが「わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」と言い始めたことは、ちぐはぐ感を感じさせます。仮に大漁の収穫がイエスによってもたらされたものだとしても、大漁の収穫によって舟が沈みそうになったからといって、イエスの力に頼って沈みそうな危機感から救ってもらうならば、単純に「助けてください」と頼むはずです。ところが、シモンは「わたしから離れてください。私は罪深い者です」と言っているのです。仮に、思いがけない大漁も、思いがけない危機的な状況もイエスに原因があると考えたとしたら、「わたしから離れてください」という言葉は理解できますが、そのあとの「わたしは罪深い者です」という発言は理解しがたいものです。

これらのちぐはぐさが生まれたのは、この物語が実際の出来事を描いているのではなくて、イエスがガリラヤ湖畔で最初に弟子たちを召した出来事があったという動かしがたい事実があったからです。ですから、ガリラヤ湖畔でイエスの話を聞こうと群衆が押し寄せてきたという状況設定の中で、初めはイエスに関心がなかった漁師のシモンたちが、イエスの指示に従ったことで大漁の収穫が与えられたのだけれども、それらの出来事すべてに神の子イエス・キリストの大いなる力が背後ではたらいているということを描くために、このような物語が生み出されたのでした。最初に書かれたマルコ福音書１章１６節以下によると、イエスはガリラヤで伝道を始められると、すぐにガリラヤ湖畔でシモンと、その兄弟アンデレの二人の漁師を弟子として招いていますが、その際に弟子たちにそれまでの生活のすべてを捨ててイエスに従っていく必然性が何も描かれていないのです。そして、この二人に続いてゼベダイ子子ヤコブとその兄弟ヨハネの召命でも同じく弟子になる必然性が何も描かれていないのです。

これは先週お話したように、人間の信仰よりも先行する神の恵みを端的に現したものなのですが、ルカ福音書の記者はこれを不自然だと考えたのでしょう。沖に出て漁をするように勧めたイエスの言葉を自分たち漁師の経験から無駄なことだと判断したことを大漁の現実を突きつけられて、自分の罪を認めた人物として描くことで、弟子として歩みだす必然性を前後の文脈をやや無視して無理やり入れ込んだのです。ですから、これらの出来事があったのち、１０節にあるようにイエスによって「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と言われて、すべてを捨ててイエスに従っていく弟子になったのだというように描かれているのです。

先行する神の恵みという神概念は、旧約聖書に描かれているイスラエルの民に対する救済の歴史を知らないユダヤ人以外の異邦人には理解しがたいことですから、ルカ福音書の記者にように、イエスの弟子となってく必然性を描きたくなるのは当たり前のことなのです。現在の私たちは聖書として旧約聖書も新約聖書もなんの苦労もなく読むことができますから、イスラエルの民に対する神の熱情を理解できます。

けれども、イエスの時代にギリシア語を話すことはできても、読むことは多くの人たちはできませんでした。十字架上に死んだけれども復活して弟子たちに現れたイエス・キリストの話を伝えるためには、話し言葉で語り伝えるしかなかったのです。しかも、幼い時からイスラエルの歴史を教え込まれたユダヤ人であれば、神の子であるイエス・キリストによって突然召されても従っていくことは理解できますが、異邦人にとってはやはり納得しがたいことだったのでしょう。ですから、キリスト教の２０００年の歴史においては、イスラエルの歴史に踏み込む記述が少ないルカ福音書さえ読めば、他の福音書は不要だということが主張されることも起こったのです。

出エジプト記１８章冒頭でも、モーセのしゅうとエトロがモーセを訪問した際に、神がイスラエルの民をエジプトのファラオの圧政から助け出し、荒れ野での４０年の艱難辛苦のときにも神が幾度も助けてくれたことをモーセは報告していますが、こういうイスラエルの救済の歴史の延長戦上にイエス・キリストの十字架があり、復活の救いがあるのです。

もちろん、私たちが洗礼を受けてイエス・キリストの弟子として生きていく道筋も開かれているのです。人間を取る漁師になるということは、直接的には伝道をして救われた人間を増やしていくことですが、ルカ福音書５章２７節以下を見ると、徴税人であるレビを弟子として召しているわけですが、当時の徴税人というのはローマ帝国の手先としてユダヤ人からみれば、圧倒的な罪人の代表格の人物ですから、イエスが弟子として召す人間としてはふさわしくない存在です。異邦人であるローマ帝国の人たちと深く交わるために、一緒の食卓に就いて食事をすることはユダヤ人でなくてもためらわれる人物です。でも、イエスはそのような社会的な偏見かも自由なのです。なぜなら、イエスは自分の使命が「正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」（３２節）というのです。そのように語ったイエスはレビの家に招かれて盛大な宴会の席にいたのでした。ですから、イエスを訴えようとイエスを追ってきていたファリサイ派や律法学者はイエスの弟子たちに「なぜ、あなたたいは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか」（３０節）とつぶやいたのでした。

イエスが宣教の目的を「罪人を招いて悔い改めさせるためである」と言っているのですが、これはファリサイ派や律法学者たちのつぶやきに対する答えのように理解しがちですが、考えてみれば、イエスを罪におとしめようと狙っているファリサイ派や律法学者がイエスと同じ食卓にいることの方が不思議なことです。これほどイエスには人との境界線がないのです。

このように考えてみると、イエスが弟子を召す基準というのは、自分に敵対する人間をも含んでいたことがわかります。罪人を招いて悔い改めさせるためだというイエスの言葉に反応して、断食の問題が提出されます。神の前に自分の罪を悲しむ気持ちを込めて行う断食をするのがユダヤ人にとっては当たり前のことなので、もし罪人である自覚が自分にあるのならば、断食をするはずではないかと言うのです。当時のファリサイ派の人たちは週に２回断食をしていました。そういう状況を踏まえたうえでイエスはご自分を婚礼の際の花婿にたとえて、神の子であるイエスが弟子たちや徴税人、罪人たちと共にいることは、彼らにとって婚礼の時以上の大きな喜びの時ではないかというのです。

主イエスが十字架の苦しみと死によって、人間の罪が赦されたのです。それは次のことをも示しています。私たちが主イエスの弟子となっても、極端なことを言えば、私たちは立派な人間にならなくてもよくなったのです。そういう人間として、誰もがイエスの召しに招かれているのです。そういう主イエスの恵みの中に私たちはみな生かされているのです。このことがイエスの弟子の召命物語には示されているのです。